福崎町と戦争

大塚　みつき

「戦後七十年」、この言葉を新聞やテレビでよく聞きます。どういう意味か分からなかったのでおじいちゃんに聞いてみました。おじいちゃんは

「おじいちゃんの小さいころは、日本は外国とせんそうをしていたんや。今から七十年前に日本はせんそうに負けて、せんそうがおわったんや」。

と教えてくれました。せんそうについて私は国語の教科書にのっている「一つの花」のお話を読んでしっているくらいで、本当にあったことだと思えませんでした。だから、せんそうについてもっと知りたいと思いました。

おじいちゃんにせんそうのことをくわしくおしえてもらいました。おじいちゃんがようち園の時にせんそうがおわったそうです。それまでは、よくくうしゅうけいほうがなって防空頭巾をかぶり、近くの森にある防空ごう

にかくれました。ようち園に行っている時はいそいで家にかえっていたのでようち園にはほとんどいけなかったそうです。夜は電とうにぬのをかぶせて明かりが外にもれないようにしたり、かべをくろくぬっていたりしました。物がなく、買うときは紙をもらいそれをもって買いに行きました。これを配給と言います。

おばあちゃんにも聞いてみました。おばあちゃんはとにかく食べるものがなくて困ったと言っていました。山でツイの実やあけびなどをとってたべたり、池でヒツをとってたべたりしていました。白いお米はなく、麦が食べられたらいい方で、さつまいもやとうもろこしのこなを食べていました。バスはまきをもやしてうごいていたそうです。

「今は、ものがたくさんあっていい時代になったな。」

とよく話しています。

また、八月八日につ語りつぐ・せんそうの

記おく」というせんそうたいけんを聞く会がありました。そこでは真田さん、山下さん、嶋田町長さんの三人のはなしを聞きました。

真田さんは兵隊としてせんそうにいきました。かん国のプサンからニューブリテン島にいくことになりました。四つの船に分かれていきましたがそのうちのひとつの船がアメリカのぎょらいによってちんぼつしたそうです。そのときにせんそうのこわさをしったそうです。その後ラバウルというところに行くために二ケ月間で五百キロを歩きました。病気でたくさんの人がなくなったと聞き食べるものがありなく、墓もなかったんだろうなと思いました。山下さんは自分からすすんで兵隊になりました。中学生のころに今の中国に一人で行くなんて凄いなと思いました。山下さんはマイナス三十度という寒さの中、食りょうなしで一週間歩きつづけました。くんれんはきびしくにげだす人もいたそうです。嶋田町長さんは小学時代の話をしてくださいました。

食べ物がたりなくてにわとりをかったりうさぎがりをしたりしていました。遊び道具は自分で作っていました。せんそうは勝っても負けてもおなかがすくのでやるべきではないといわれていました。

その後、民ぞくし料館でてんじを見ました。防空頭巾がありました。防空けいほうがでたときにかぶるものです。おじいちゃんやおばあちゃんのはなしにもでてきました。こんなものをかぶって役に立つのかなと思いました。

ぼうくうカバーもありました。これもおじいちゃんの話に出てきました。紙でできたランドセルもありました。ぬれてもだいじょうぶなのかなと思いました。赤紙もありました。この紙がとどくとへいたいさんにいかなければなりません。し料館のてん示物を見ていると話に聞いたものが本当にあって、むかしのひとがたいへんなおもいをしていたことがわかりました。

わたしは、いろんな人の話を聞いて、せん

そうはたくさんの人の命をうばうとてもおそろしいものだとわかりました。七十年たって日本はとても平和な時代になりました。これからもずっとこの平和が続いてほしいと思います。そのためにどうすればいいかまだわかりませんが、これから考えたいです。